

実践的都市計画論

田村明

都市計画の未来性

都市計画は常に未来に向って賭けている。人類の明日があり、人間社会に未来がある限り、都市は今日現在のままに止まることはできないし、都市計画もまた、都市のあるべき姿を追求して止まないであろう。

都市計画は人間にとっての総合的な環境を将来に向って造りだすための技術である。そのためには都市の将来像を画き、これに必要な施設や諸サービスの種類や内容を考え、これらの最も望ましい組合せ、配置を生みだし、さらにそれらが最も適切に提供されるような方法、時期を総合的に提示する。また、この方向にとって不必要な活動を制御し、必要な活動を促進させ、保全すべきものを選びだし、それらが全体として人間および社会にとってのあるべき環境の向上を計ろうとするものである。

もちろん我々は未来について確実に知っているわけではない。そこで少しでも未来を探索するためにさまざまな予測の技術も開発された。それらは我々が計画する際の補助的手段となりうるだろうが、その予知能力には誤りもあるし、限界もある。そこで数学的な予測手法にとどまらず、人知の総力をより多く活用したデルファイ法なども生れる。くしくも名付けたように、人智をこえた神のお告げを人為的に作りだそうとするのである。

しかし、未来に対して明確に決定的な方法は見つからない。そこで、都市のあるべき姿についての深い洞察の下に将来の姿を求めてゆくことが必要である。それは人類の文明の流れを見極めた上で行われる。都市とはいったん始った以上、人類文明の集積として息の永い永続的な存在だからである。したがって都市計画は、科学を活用し、技術を駆使し、さらには文明論的視点とフィロソフィを加えながら、それでもなおかつ未来へ向って予測できない〈賭け〉の要素を含んでいるのである。その時点にいた誰かの決断と実行力によって、都市計画は行われてきた。その結果は、時に誤りもあり失敗もあったかもしれない。また、時代とともに役割を失い、修正すべきものもあった。しかし、良い計画は永続するし、たとえ修正されても、次の時代をつくるステップとしての役割を果たすことになるのである。

現在の都市は、多くの先人の賭けによっての蓄積の上に生きている。京都の町の計画的な格子状の町づくりは、古く1000年も前の平安京の建設に始まる。その後何度も大火や戦乱に荒廃し放置され、町の中心も移動し形態も変化しながら、基本的な格子状都市を現在まで形成してきているのは、都市計画的な蓄積によるのである。我々の都市も多かれ少なかれ、このような蓄積の上に成り立っている。

そこで、我々もまた、未来へ向って何を残してゆくかを賭けなければならない。都市は姿を変えつつも、人間個人の生命の

何十倍も永続するものである。我々の仕事はその中の短い一時期にすぎないかもしれないが、都市という永続体に対して自分の生命の時間をこえて賭けているのである。後からの批判は容易にできる。しかし、もしその時何等かの決断が行われず、成行きのままに放置したのと比べれば、相当大きな相異があるはずである。それに対して常に身を現場から離して結果を見ての批評だけでは都市は良くならない。厳正で客観的批判的な精神は常に必要だが、批判に終らず、英知をもち、さらに英知を超えた未来へ向っての賭けも必要なのである。

都市計画の実現性

ところで、都市計画は未来のあるべき姿を求め、それへ賭けているからといって、単なる理念や、哲学に終るものでない。また美しい理想図や、現実と関係のない空想図でもない。

したがって、プラトンの理想国や、カンパネラの太陽の都、トマス＝モーアのユートピアなど、未来都市への数々の示唆を与えはするがそれ自体が都市計画ではない。

我々の都市計画の対象とするものは、白紙の世界でも、抽象的な観念の世界でもない。それは、我々が住み、働き、遊び、生活しているこの現実の生きた都市そのものである。その対象とする現実の都市が、どんなに混乱し、よごれ、好ましくないとしても、いや、それ故にこそ都市計画は必要なのである。すでに理想的な町であるならば都市計画は不要であろう。しかし、現実の都市は時代とともに、どんな町でも必ず問題が発生してくるし、目に見えない問題を内包しているものである。したがって、都市計画の不要な都市は存在しないが、問題があればあるほど、その必要性は高まるのである。都市計画は、いわば生きた都市に対する医療手段である。問題がなければ、予防措置にとどまるが、問題によりさまざまな治療措置を加え、場合によっては、手術を加えることも必要になってくるのである。

いずれにもせよ、都市計画の対象は、現実の都市そのもの、いわば生身の都市そのものである。白紙や模型の上でのスタディは行われるが、それはあくまでもスタディにとどまる。我々の対象にする都市は、多くの、年齢も、職業も、性別も、所得も、性格も、願望も、思想も異なる多元的な人々が、さまざまな思いをもって現に生活している都市そのものである。これに将来に向けて全体の都市として必要な手段を加え、問題の除去を計り、あるべき姿に向け、不足を補ってゆくものであるが、そのために、生きた都市から問題をとらえ、願望を探ることは当然のことである。しかし、いよいよ計画の手段を加え、これを実行するに当たっては、計画はさまざまな作用や反作用を受けざるをえない。計画が抽象論でなく、現実のものである限り、それはひと

つの力学関係である。生きている都市は喜びもするが、うめきもするし、かみつきもする。たとい、どんな治療上の必要があるからといっても、手術に対して拒絶反応をするのは当然であろう。また手術は他の部分への副作用をとまなうかもしれない。都市は全体として有機体であるばかりでなく、個々の部分もまた生命体である。そこで都市計画は全体としての有機体の維持向上に向けられるが、同時に、個々の部分の利益、不利益と常にからみあう宿命を持っている。全体を生かすためであっても、手術される部分は痛いのである。

現実の都市は、とくに都市計画という手段を外から加えなくても、それなりに活動してゆくように見える。たしかに、我々は電車に乗り、道路を走り、上水を使用し、学校へ通っているが、実はそれらは、すでに実行された計画の上に立っているからこそ生活しているのである。現実の都市で全く計画の手が加えられなかったものは存在していない。しかし、反面、都市は計画によらなくても変化し、造られてゆく性格をもっている。都市全体にとって計画的に好ましいかどうかにかかわらず、都市の中に働く個別的な主体によって造られてゆく。とくに現代都市はあまりにも肥大し、都市を造り動かしてゆく力も主体も複雑化したため、都市全体を生かして計画することが困難になっている。各個別々の事業はそれぞれの個別目的や、個別の利益を求めて自然発生的に都市を作ってゆく。ほっておけばその結果は、民間企業や個人の個別利益の吸収のため、外部経済を内部化し内部不経済を外部化する力が働き、全体の都市を混乱させる。個々の行動によって都市という有機体は、自動的に生存しているが、ひょっとすると、それが癌細胞に変化するかもしれないし、あるいは癌でなくても、末端活動の肥大化は、内部の中心機能や全体の機能を衰弱させることもある。交通難、水源不足、廃棄物処理の困難性などはそのような問題である。

このような現実都市を相手にして行われる都市計画は、総合的長期的な価値判断なくしては、都市の未来はないが、また個別的部分的現実的な価値判断とも調和を計らなくてはならない。そして何が都市を永続させ、住む人々の生活を全体として維持し向上させてゆくのか、を選択することが必要である。

未来性と現実性の矛盾

未来へ向って賭ける都市計画と、生きた現実の都市への対応は、〈あるべき都市〉と〈ある都市〉との関係であり、必然的に乖離を生じやすい。未来指向の計画は、もともと現実を超える性格を有するし、現実の困難にぶつかると、その対応力を失って、理念や数字や模型の世界へと逃避してしまうことが多い。そして現実都市の矛盾を解析し、これを批判するにとどまることになる。

もちろんそれはそれなりに、ヴィジョンとしての計画や、理論としての計画として発展し、学問としての計画学をすすめることになり、計画家を養成する基礎がためになる。また、それがさまざまな経路を通じて永い間に世論形成や市民意識、官庁の政策にも影響を与えてゆき、遂に現実の都市を変えてゆくことになることもある。すぐれた思想には、始めは受入れられなくても、そのようにして影響を与えたものが多い。しかし、すぐれた思想は、そうめったに出るものではないし、またよほどの天才に期待しなくてはならないだろう。現実要求されるのは、今のこの都市をどうするかである。そして実際には多くの人々が直接間接に現実の都市建設や活動にたずさわり、それによって都市を好ましい方にも好ましくない方にも動かしている。それなら、どうしてもこの現実都市に対して働きをする都市計画が必要である。

残念ながら実際の都市建設は、都市の骨格や重要な臓器を形成するための公的事業であっても、それぞれ個別部門ごとの論理で行われ、都市全体としての有機的な形成が計られないことが多い。そして未来的、総合的な都市計画を考えるよりは、極めて狭い局所的な視野の下に、個別事業の計画や、あるいは法規による都市計画手続きに乗せるための計画にとどまっていることが多い。これらは、本当に都市を未来へ向けて創造性をもって計画してゆく、長期的で高度な視野が欠け、〈現実的、あまりにも現実的、個別的、あまりにも個別的〉な計画に終ることが多いのである。

それは、地域社会によって支えられ、地域社会に対して総合的責任を負うべき自治体が、部門ごとのバラバラな集合体にすぎず、自治を支える市民も市民意識も育ちにくかったことに大きな原因がある。地域社会はひとつのまとまった存在として、未来へ対する価値観をもち、公的部門の調整と、個人や私企業の適正なコントロールによって有機的な都市形成を計り、これを現実化できる計画が行われなければならないのである。

実践的都市計画の必要性と意義

この都市計画の未来性、総合性と、都市計画の現実性とを止揚しようとするのが、実践的な都市計画の立場である。

都市計画を未来的、総合的にとらえようとするのは、主として大学や研究機関の立場であるが、研究的な立場だけでは、現実を変えてゆく未来への賭けとはならない。また都市計画を個別事業的、手続的にとらえているのは官庁的な立場に多いが、ここでは、個別事業だけが強調され、総合性や、未来性につながる高い次元での都市計画が消滅し、都市計画の意味が極めて矮少化され、あるいは分解されてしまっているのである。学問的な都市計画学の必要性も、個別具体的事業も当然極めて重要なものであ

るが、それらとともに本当に都市計画の学問を生かし、具体的な多くの事業を生かしてゆくためには、これらをつなげてゆく実践的都市計画の立場が確立されなければならないだろう。多くの都市の現実的なやみは、そのような実践的な都市計画以外では解決しえないはずである。

実践的都市計画は、学問的都市計画と、現実都市とを結びつけ、両者を具体的な都市づくりの中で生かしてゆこうとするものであるが、そのような中間的な挿入項として位置付けられるだけではない。すでにのべたように、都市計画は未来の人間環境を作りだすための技術であるが、未来はいきなり現出するものではなく、必ず、現実の都市の現実の姿から出発し、それが段階的な課程を経て未来へ達するのである。都市の未来への構図は、もちろん現実との間にかなりの飛躍があるだろうし、あるのが当然である。しかし、それを実現化してゆくプロセスには飛躍はありえない。実際の都市にぶつかって、さまざまな反応を受けながらその中で、一步一步困難を解決してゆくのでなければ、現実の都市は決して思うとおりにとは変わらない。

実践的都市計画は、現実都市にぶつかり、たった一つでも現実的変革をすることからスタートする。それがどんなに小さなものでも、あるいは、たとい局所的に見えることでも、それが未来へ賭けた第一歩であるならば、計画は空論ではなく実践のものとなったのである。総合的であろうとし、長期的であろうとするには、理想や理論を実現させる現実とかかわり、小さく局所的であっても、まず事実とぶつからなければならない。ただしこの小さな第一歩が従来の個別的計画や事業だけに終らないためには、少なくともこれまでの行きあたりばったりのものや、あるいは型にはまったものではなく、それが次の新しい変革をよびおこすステップとしての戦略的な拠点になっていることである。

一見、小さく部分的に見えても、一つの変革が、他のさまざまな未来指向の計画を勇気づけ、刺激し、新しい方向に向けて順次全体を動かすことになるのである。ところが現実化のプログラムを欠いたり、または困難にぶつかって、後退してしまえば、たとえ龐大な計画でも空論としてほこりをかぶって放置されてしまうことになるだろう。これまでの諸計画は、その未来性や、総合性にすぐれた内容もちながら、まず、現実とのかかわりを欠き、その第一歩をふみだす道筋を明らかにし、現実化しうる力をもたなかったことに問題があったのである。

実践的都市計画は、抽象論ではないから、生きた都市の現実の問題や、計画に反対するさまざまな主体に具体的にぶつかって、その反応や反撥を受ける。それは決して生やさしいことではないが、それによってしだいにどこから、どういう方法で取り組むべきかのノウハウを得ることができる。それらの多くの経験は、

たんなる経験に終わらさず、都市のあるべき姿と方向性にてらしめてみて、その具体的な展開手法としての一般性をもってくるのである。現実にふれ実践を行ってみなければその方法は分らない。

このような実践的都市計画は、常に現実の都市にぶつかっているから、計画を実現する場合の利益、不利益、その反応等についても、あらかじめ予測できる。したがって、それらをもとにして計画内容自体を実際的な本当にあるべき市民要求の内容とし、またその実現方法も、確実度の高いものにすることができる。一度抽象的に決められた計画だけが正しいわけではない。現実の中でフィードバックされ、計画をより現実的に変えることもまた必要なのである。実践的都市計画は、ただ固定的な正義感や、理論法律論、手続論に立つのではなく、本当によいものは何かについて、開いた立場にいる。そうした立場は、非定型流動的で、一般の静的都市計画論に対して動的都市計画論ということができよう。未来へ向って賭けている都市計画は、現在の固定した制度や硬直した考え方だけに制約されるのではなく、積極的に新しい内容や方法を求め、新しい解決法を求めてゆく。現在型だけにとらわれるならば、都市計画は不要だろう。未来性のないものは都市計画のねうちがないからである。

もちろん、動的都市計画という非定型流動性は、理想を失い理論を失って現実に流されることではない。むしろ、理想を持ち、それを実現させる方法を探ることで、目はいつも未来にあるとともに、現実から足を離さない。だから、今すぐできなくても未来に向って好ましいものを常に準備し、現実に機会がくればただちに実現させ、また実践の中で、未来へ向う具体的な手段を見つけることである。本当の未来への計画は実践的計画から生れるのである。

実践的都市計画の実現

当然のことながら、実践的都市計画は、実践そのものだけに埋没することではない。実践を通じて我々は都市の実態について極めて多くの貴重な材料を手に入れることができる。そこで現実を現実だけとしてでなく、これらから一般的な原理や原則をつかみ、また現実の相互的なからみと矛盾についての解析を行っておくべきで、そこに都市分析の理論も生みだされる。そのような客観化を行わない現実主義だけでは、総合的な視点を失い、未来的指向も失ってしまう。近くに寄って見ること、さわってみること、嗅いでみることの外に、また遠くから、離れて全体を眺めてみるのでなければ、群盲象をなでるのとえのとおり、象の全体を認識することはできない。実践的都市計画は、未来指向と現実との矛盾と緊張関係の中に、新たな実践的解決と理論を築こうというものである。

一方的な観点だけを強調するのではなく、常にそれと異なる観点、その周辺にあるものにも注意を払うのが実践的都市計画である。固定的に一つの方向からだけ都市を判断するのはあまりにも複雑で巨大すぎる。縦横斜めから見、断面もしらべてみる。しかし、巨大な都市について全部の断面、しかも生きたままの断面を知ることはできない。そこで実践の中からの体験を、体験のままに終らさずに、これから全体を知るための解析や構築の方法を開発しなければならないし、それが新しい学問領域を形成してゆくことになろう。

実践的都市計画を行ってゆくためには、深い未来的洞察、生きた現実都市の把握、これを未来へ向け変革してゆくための実践的計画能力が必要だが、さらにこれを生かしてゆくためには、市民に支えられた実行力ある計画主体の確立が必要である。そのために、利害関係の調整をはかりつつ計画主体となってゆく独立の計画委員会のような方法も検討されていいたろう。いずれにせよ、計画は〈かっこうよい〉ものではなく、利害関係にからみ、これをコントロールする立場をもつから、計画はそれらにぶつかり、各方面から攻撃を受ける宿命にある。また、個別事業主体の行動を全体の観点から制約するからさまざまな意見対立を生ずる。さらに、計画によって市民全体の利益になったとしても、個別的部分的な市民との対立や反対が生ずるだろう。そのような宿命を超えてでなければ計画は実践的なものとはならない。もし衝突をおそれて計画そのものを否定してしまえば、将来の都市と全体の市民に混乱と不快と不利益を与えることになる。個別の利益や要求をそのままの形で自由に認めれば、かえって都市は衝突と混乱で、自由を失うのである。

しかし、無用な衝突は極力避けられなければならない。そのためには、都市計画を専門家のものだけではなく、市民が市民全体のものとして、そして自分たち自身のものとして感ずることが必要である。都市環境は自然に存在したもので、他人からおしつけられたものでもなく、市民自身が築き上げてゆくものであり、市民社会の成立と、市民によって創立された自治体によって計画は行われるべきなのである。

●たむら・あきら／横浜市技監・前企画調整局長